

若手が育つための周り自分

1. 技術者が育つ環境を整える責務

若手技術者は一人で育つものではない、育てる環境を整えることをみなで確認すべきだ。そしてこれを個々人のものとしてではなく、みなで共有することで、世の中への注文としたい。人材の育成では幾つかのステップを踏む必要がある。私の経験から、動機付け、解きほぐし、自信付けの3つのステップで可能となり、人材育成のホップ・ステップ・ジャンプと言える。動機付けではヒトが、解きほぐしでは知識や技術の体系が、自信付けでは経験と奨励が鍵だと思う。人材育成の重要性がしきりと聞かれるが、具体の一步はこの3段階の認識にあり、これらをコーディネートする人の存在である。

2. 技術者を取り巻く環境の変化

21世紀になり10年が経過した直後の東日本大震災、大津波と原発事故、そしてエネルギー危機、その後の余震がようやく収まりかけた頃、2012年12月に中央高速道路笹子トンネルの天井板崩落事故が発生した。年明けには、東京の大雪で首都高速道路の大渋滞が報道された。こうした自然災害、あるいは人口減少社会のなか、国土荒廃を連想する社会資本関連の事故の報道は技術者として看過できない。もちろん地球規模での環境の変化もあるが、人工物をきちんと保守して次代に引き継ぐことができない「社会的要因の存在」に危機意識を持つ。「人材育成の中長期ビジョン」の策定では、このような時代認識が重要であろう。

3. 技術者の枯渇と技術者の新しい使命

また、技術者の枯渇が問題視されているのが現

在の日本である。技術者に対する眼差しが、これまでとは違った角度から注がれている。以前も技術者への関心が高まった時期があった。公共事業の五ヵ年計画が推進されていた時期で、その動きは戦後の復興期から経済成長期へと進み、経済大国をつくり終えるまで続いた。しかし、20世紀の末から技術への期待がバブル経済の波にのみ込まれ、技術者志願が極度に低下した。技術者がいなくても国土が維持できると錯覚した時代もあったように思う。五ヵ年計画の事業開始から古いものでは50年、60年が経過して構造物等の劣化が問題となっている。

どのような職域にいるかで違うと思うが、技術者としての使命とそのミッションを具体的に移すビジョンを専門分野毎に持つべきだろう。例えば、従前は事業ごとの個別補助金であったが社会資本整備総合交付金に変わり、地方公共団体にとっては自由度が高いというメリットを活かすことができる状況となった。創意工夫も可能になる。しかしその実施では、従前の知識や技術を活かすことができないと感じられる。国の予算執行のかたちが変わると地方公共団体に所属する技術者の仕事も変わる。求められる技術の質も異なる。そこではより幅広い知識、経験の積み上げ、人脈が求められることになろう。すなわち、これからは専門技術をきちんと備えたうえで、タコつぼ型に陥らず、皿型となって多岐に連携ができるようでないといけない。互いの経験を分かち合うことで多くを共有し、交流の機会を通じて人脈を形成する。それこそが技術者にとって必要かつ必須ではないか。

一般財団法人 公園財団 理事長

みのも
蓑茂

としたろう
壽太郎



4. 技術者が育つために周りがやること

長引く不況の中で、技術系職員の新規採用を抑えてきた団体が多い。経験から言えば、技術者は部下を持つことで成長するケースが多い。新規採用は、単に人手充足ではなく、上の年齢層が成長するための手段としても考えたい。技術者の任務は、社会の要求へ答えを出すことである。そのニーズが上澄みとするなら、その下や底部にはウォンツ・想いがあることを意識しなければならない。日常を少し離れて大学や学会とのコンタクトを勧めたい。大学は社会を映し出す鏡だと思うが、その鏡に映るのはニーズだけではないことを知るべきだ。だからこそ若手の技術者には、恩師との交流や学会への参加を求めたい。そのための環境を周りは用意しなければならない。学会の理事会等に退会届が提出される理由を見ると、忙しくて学会活動に参加できないためというのがある。残業が当たり前の現実をみると納得せざるを得ない。これからの技術者は、もっと幅広い能力がないと困るだろう。植物が必要とする三大要素として窒素、リン酸、カリがあるが、私はこれを人が育つ環境の三大要素として知識、経験、人脈としている。そうしたことを若手に意識させた人材育成モデルとこれに裏打ちされた昇進モデルを組織は示すべきである。

5. 技術者として育つ環境を自ら作る

近年は大学院修士の若手技術者が多くなった。建築や土木などの工学系では6割強が、農学系でも4割以上が大学院へ進学して修士の学位取得後に社会人になっている。彼らは6年間の専門教育を受け研究経験があり、学部卒の人達よりも主体

的に仕事に取り組む訓練ができています。大学院においては研究科あるいは専攻、または指導教授の方針によって、学会での発表を義務化しており、学会活動歴を持つ人が多い。学会では学生を会員として迎え、会費面で優遇しているが、修了と同時に退会、会費未納の幽霊会員と化することが多い。仮にきっかけがどうであれ、自ら活動する学会員として継続する努力をしてほしい。学生会員として優遇し育ててきた人が社会人になった途端退会するのを防ごうと、若年会員会費を設けようとしているところもある。学会は多様なサービスから実は大変有益なのである。ぜひ社会人技術者として学会活動を続けてもらいたい。

また、先に述べた技術者の新たな使命として言うなら、隣接分野の技術者との交流を盛んにすることが必要だと思う。また、本誌の読者に望むこととして、異業種交流も大事だが、建設系の隣接分野の人との交流会等を企画してほしい。きっと技術文化の相互交流につながると思う。これからは高度な技術レベルが求められるが、それは裾野の広さゆえの高さでなければだめだと思う。この裾野の拡大は、本に向かった勉強によってではなく、多様な人との交流による収穫の方が効果的だと思う。さらには夢を持ち、夢を志に変え、これを目標に転化できる人になってほしい。達成感、成長の実感、自ら学ぶ姿勢、これはキャリアデザインの実践である。CPDや資格取得は当然として、キャリアアップを目指すことになるが、これからはキャリアチェンジも想定内とし、自立・自律して自分を磨く時代である。